

# 「拡大化された名詞」

——英語教育における一方法論としての提言——

谷岡 知美\*・池庄司 英臣\*\*

(平成28年10月31日受付)

## “Enlarged Nouns”

: a Suggestion for the Teaching of English at University

Tomomi TANIOKA and Hideomi IKESHOJI

(Received Oct. 31, 2016)

### Abstract

This paper reports our new approach in reading English through the concept of “enlarged nouns.” We held a reading circle of an English text with about 10 people, including students, staff members, and teachers, as an extracurricular activity in the Fall semester of 2015, basically once a week after school. The text was *What is Freedom* written by Bertrand Russell in 1952 prepared for liberal arts education at university level with notes in Japanese. Although grammatical structures of sentences are not so complicated, “nouns” which constitute subjects or objectives, etc., are usually long and very difficult for students to understand to identify in a sentence. Rich concepts, often abstract and requiring general knowledge of historical backgrounds and social conditions, are condensed with embellishments or quantifiers into a noun. The effect of our new way of explaining and analyzing English sentences through the concept of “enlarged nouns” was successful for our case.

**Key Words:** enlarged nouns, an extracurricular activity, a foreign language education, liberal education, attentive reading

### 1. はじめに

著者たちは、2015年秋から2016年夏の約半年をかけて、本学学生、教職員ら約10名で大学教養部用に編まれた約40ページのテキストを読了した。テキストは、バートランド・ラッセル (Bertrand Russell, 1872-1970) が1952年に書いた『現代の自由—その本質と限界—』(*What is Freedom*) に日本語の注釈をつけた小冊子であるが<sup>1)</sup>、文の構造そのものは明解であるものの、含まれる名詞・名詞句・名詞節が場合によっては3-4行にもわたる長いものもあり、学生諸君は精読するのにながかりてこずったようである。

そのため著者らが強調したのは、種々の句や節などで修飾され長くなった名詞句・節を「拡大化された名詞」(“enlarged nouns”)と呼び、修飾句などを取り去った名詞を「核となる名詞」(“a core noun”)として学生へ意識させることであった。これにより、修飾され長くなった名詞句・節を単一の名詞として扱うことができるようになり、動詞により確定してくる基本の5文型 (“the five basic sentence patterns:” 1. S+V, 2. S+V+C, 3. S+V+O, 4. S+V+O+C 5. S+V+O+O)などに配慮する余裕などもできたようである。本稿では、「拡大化された名詞」を用いた、英語教育の場としての自発的な読書会での新たな取り組み

\* 広島工業大学工学部電子情報工学科

\*\* 広島工業大学名誉教授

を報告し、その効果と今後の展望を検討したい。

## 2. 「拡大化された名詞」の有用性

「拡大化された名詞」というアプローチは、著者ら独自の新しい試みである。まず、英語における名詞の定義と機能について少し触れ、次に「拡大化された名詞」の特徴について述べていきたい。

### <2・1> 「名詞」とは

様々な判断基準があるため「名詞」を定義することは困難であるが、ここでは古典的な定義である「名詞」とは、人または事物の名称をあらわす語である」としておく<sup>2)</sup>。どの言語においても、名詞が文章中意味上中心的な機能を果たすことは言うまでもない。一方で本稿では名詞の文法上の機能が主な問題となってくる。文法上では、クアーク (Randolph Quirk) とグリーンバウム (Sidney Greenbaum) が、典型的な名詞句を「文における主語、目的語、補語、または前置詞句における補語として機能する」(“the noun phrase typically functions as subject, object, complement of sentences, and as complement in prepositional phrases”)と定義し、主語における名詞句を以下の5パターンに分類している<sup>3)</sup>。

- |  |   |                |
|--|---|----------------|
| (a) <i>The girl</i><br>(b) <i>The pretty girl</i><br>(c) <i>The pretty girl in the corner</i><br>(d) <i>The pretty girl who became angry</i><br>(e) <i>She</i> | } | is Mary Smith. |
|--|---|----------------|

例文 (a) と (b) は、冠詞 + 名詞、冠詞 + 形容詞 + 名詞といった基本的な前置修飾のかたちをとっている。それに加え例文 (c) では、冠詞 + 形容詞 + 名詞 + 形容詞句 (前置詞 + 冠詞 + 名詞) と、前置修飾 + 句を用いた後置修飾のかたちをとっている。さらに例文 (d) では、冠詞 + 形容詞 + 名詞 + 形容詞節 (関係代名詞 + 動詞 + 形容詞) と前置修飾 + 節を用いた後置修飾というかたちをとっている。句 (“phrase”) とは、「主部と述部を含まない関連した後の集まり」(“A phrase is a group of related words not containing a subject and a predicate”)であり、節 (“clause”) とは、「主部と述部を含む関連した後の集まり」(“A phrase is a group of related words containing a subject and a predicate”)と定義される<sup>4)</sup>。例文 (e) は、本来は名詞の一部と考えられる代名詞を単純に主語としたものである。(a), (b), (c), (d) と例文が進むにつれ、名詞を修飾する語句が長くなっていることがわかる。これらの例文において、著者らの言う「核となる名詞」は “girl” を指し、それを前置・後置から修飾し、

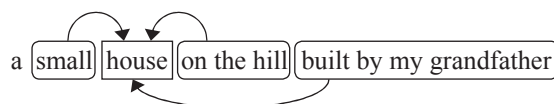
語・句・節が長くなっていくかたちを「拡大化された名詞」と呼ぶのである。ラッセルの文章では、例えば、例文 (a) + (b) + (c) の構造を持つ “extinction of the freedom to read books disliked by the Roman Catholic Church, 11” や、例文 (a) + (b) + (c) + (d) の構造を持つ “such a vast organised hypocrisy as the pretence that the Soviet government represents the interests of the proletariat, 37” など、このような「拡大された名詞」が様々なかたちでさらに長く表現されている。

ウィリアムズ (Geoff Williams) は、文の中に語・句・節のいずれにも該当しない関連した語のまとまりを中間のランク (群のランク) と呼んだ。さらに、「名詞群の複雑さ」を指摘し、名詞群が抽象的であり、長く込み入った構造をしているものの理解の難しさを解説し、これらの内部構造をより詳細に論議することが必要であると論じている<sup>5)</sup>。ウィリアムズが対象とした学習者は英語を母国語とする子供たちであったが、やはり名詞を中心とした文法構造の解釈は重要であると言ってよい。本読書会では、まず「核となる名詞」を指摘し、「拡大化された名詞」を中心とした解説を、英語、また書かれた内容両方においておこなった。学生は、文章の内容を一つの名詞を中心に考えることで、文法構造の理解のみならず、抽象的でやや難解な内容も解釈しやすいのではないだろうか。

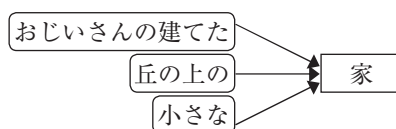
### <2・2> 「拡大化された名詞」と修飾語句との関わり

本読書会への参加者が母語を日本語とする者であったため、日本語の言語構造が文章理解の基盤となっていた。しかし、「名詞構文」(“noun syntax”) を良い例として挙げるように<sup>5)</sup>、英語における名詞の修飾と、日本語のそれとは大きな差がある。例えば、“a small house on the hill built by my grandfather” という英文は、日本語では「おじいさんの建てた丘の上の小さな家」という具合に修飾される名詞が常に修飾語句の最後に来る<sup>6)</sup>。

つまり名詞を  , 修飾語句を  で囲み、図式的に書けば、



に対し、日本語では、



となる。

日本語は比較的語順が自由な言語であり、動詞が文末に現れる以外は要素の位置の入れ替えが可能であるが、英語

は主要部前置言語であり、長い語句が短い語句より後に出現する傾向があると言われている<sup>7)</sup>。この日本語と英語の構造の違いを意識させ、学生には「拡大化された名詞」を対応する日本語の名詞とに変換させる訓練はかなり効果的であった。

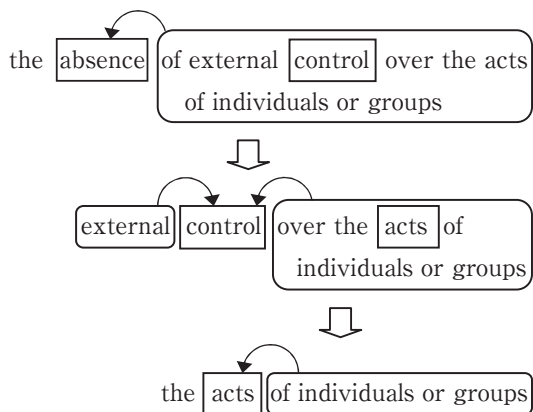
子供の言葉とは異なり、大人の言葉（特に書き言葉）においては、種々の内容が概念化されたものは名詞として集約される。我々の読んだテキストの場合、高度に概念化されたものが「拡大化された名詞」として表現されており、それを日本語の名詞に変換する訓練は、新たな抽象度の高い概念を自学あるいは獲得することにもつながったようである。

### <2・3> 「拡大化された名詞」と前置詞との関わり

名詞あるいは名詞相当語句は、英文中において主語あるいは目的語として用いられるが、それよりも「拡大化された名詞」の観点からは、それらが前置詞と結びつき「核となる名詞」を修飾する句として使用される場合が問題となる（副詞句として使われる場合は別として）。以下の日英の比較が示すように、英語では前置詞が使われるが、日本語では後置詞ともいうべき助詞が使われる<sup>8)</sup>。

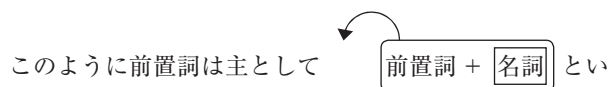
- |  |            |
|--|------------|
| a. read <u>a book</u>                  | a. 本を読む    |
| b. the <u>construction of the road</u> | b. その道路の建設 |
| c. <u>afraid of dogs</u>               | c. 犬がこわい   |
| d. <u>from Boston</u>                  | d. ボストンから  |

また、しばしばそれらは日本語と異なる「入れ子構造」となっていることも学生の理解を困難にしていたようである。例えば、ラッセルの“In its most elementary sense freedom means the absence of external control over the acts of individuals or groups, 9”という文において、「核になる名詞」である“absence”は、一つの修飾語句を伴っているが、それが以下に示すように、「入れ子構造」となっている。



この例においては前置詞“of,” “over,” “of”に導かれた

“control,” “acts,” “individuals or groups”が、それぞれ核になる名詞を「入れ子構造」的に修飾しながら、最終的には“absence”を修飾している。



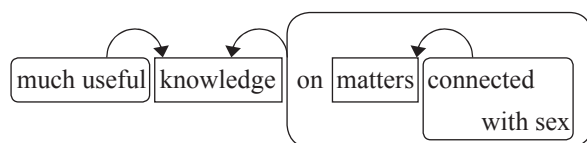
このように前置詞は主としてこの形で後ろから「核となる名詞」を修飾するという事実は、「動詞+前置詞」という熟語的な用法よりも、もっと強調されるべきである。

### <2・4> 「拡大化された名詞」と分詞との関わり

関係代名詞を用いないで動詞の現在分詞・過去分詞が直接名詞を後ろから修飾する場合がある。例えば、“a purpose running contrary to, 16”は、



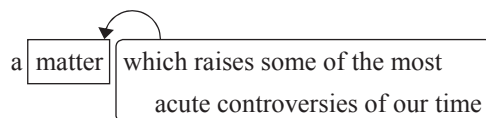
というかたちで後ろから修飾される。さらに、“much useful knowledge on matters connected with sex, 31”という文章は、<2・3>で述べた前置詞と、加えて過去分詞によって「核となる名詞」が修飾されており、



というかたちとなる。このように、「拡大化された名詞」は重なり合いさらに拡大化されていく。関係詞を用いて名詞を拡大化する場合すぐ気が付くが、動詞の現在分詞および過去分詞が単独で名詞を後ろから修飾することは、「拡大化された名詞」を論じる場合、留意すべきことのひとつであろう。このように使用される過去分詞を本動詞と混同し立ち往生することがしばしばあるからである。

### <2・5> 「拡大化された名詞」と関係詞との関わり

これまで述べてきたのは、「拡大化された名詞」の句に関してであったが、次に「拡大化された名詞」の節について触れておきたい。関係代名詞によって「核となる名詞」が修飾されている例としては、“a matter which raises some of the most acute controversies of our time, 20”があり以下のように示される。



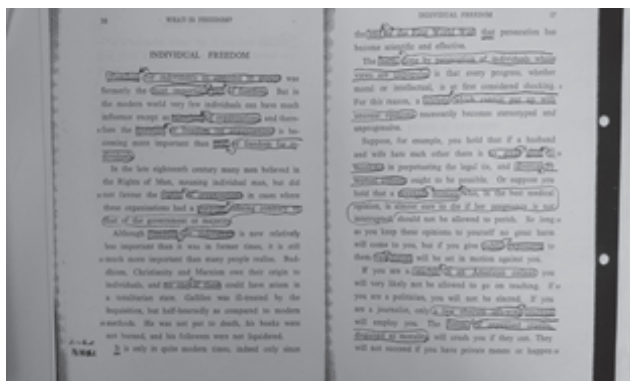
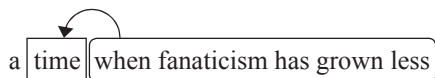


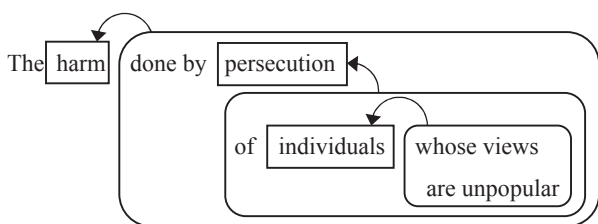
Fig. 1 Supplementary teaching materials for the reading circle.

また、関係副詞を用いた例としては、“a time when fanaticism has grown less, 41” があり、



と図式化される。

さらに、関係詞に加えて<2・3>で述べた前置詞、さらに<2・4>で述べた過去分詞によって修飾されている“The harm done by persecution of individuals whose views are unpopular, 17” という文章は、



とさらに「入れ子構造」が複雑となり「拡大化された名詞」は一層拡大されていく。このような「拡大化された名詞」が混ざり合った複雑な文章を少しでも容易にするためには、まず「核となる名詞」を見極め理解していくことが有効であろう。

### 3. 「拡大化された名詞」を用いた実施方法

読書会は1回を90分から120分とし、2015年10月から2016年7月（途中、冬休みと春休みを含む）まで合計25回程度実施した。従来どおりテキストの精読に重点を置いてあるが、「拡大化された名詞」のアプローチをとったため、1回約2ページを限度とした丁寧な指導をおこなった。

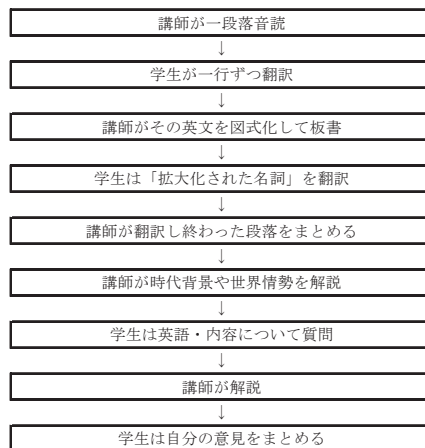


Fig. 2 Basic flow of the reading circle.

#### <3・1> 読書会形式

事前準備として、テキストに加えて Fig. 1 に示されたような、すでに「核となる名詞」と「拡大化された名詞」を明確に記した副教材を配布した。参加者は、日本語の注釈に加えてこの副教材によってテキストを読み込んでおく必要があった。学生によっては、原文・日本語訳両方をワードに打ち替え準備をし、読書会当日はできるだけ副教材を当てにすることなく精読に臨んだ者もいた。また、英語のネイティブ・スピーカーにテキストの音声を吹き込んでもらい、必要であれば事前に音声を聴くよう助言した。音声を聴くことは、チャンキングの持つ効果と同様に<sup>9)</sup>、「拡大化された名詞」のかたまりを強く意識できる。さらに、文法の基本をしっかりと押さえておく必要があったので、参考書として高等学校外国語用教科書である『CROWN English Series I, II』を用意し<sup>10)</sup>、文法の自主学習用として配布した。

#### <3・2> テキスト

冒頭で述べたように、ラッセルの『現代の自由－その本質と限界－』をテキストとした。このテキストは以下に示す第4章で構成されている。

- I. National Freedom -Freedom of the Group- Individual Freedom
- II. Political Freedom -Economic Freedom- Mental Freedom
- III. Personal Freedom -Government and Liberty- Liberty and Ideas -Limits of Tolerance- Education of Freedom
- IV. The Future of Freedom

ラッセルは本書において、歴史的、社会的、個人として、組織として、様々な角度から見た自由を論じている。本書



が書かれた 1950 年代は第二次世界大戦直後の混乱の時代であり、ヨーロッパではソビエト連邦を中心とした共産主義が勢力を増大し、一方でアメリカは経済的最盛期を迎え世界の大国となった。そのような時代の中、イギリス人のラッセルは冷静に「自由」を見つめ、抽象的な世界を彼なりの明確さで明らかにしようとした。本書の文法構造は複雑なものではなく、用いられている語彙も過度に高レベルではないが、特徴としては、例えば “There are still people in Russia who grew up before the present school system was perfected, and therefore the government still finds it necessary to persecute deviationists; but when all the population has enjoyed the full benefits of indoctrination in school, there will no longer be any heretics, and the Soviet Government will be able to point triumphantly at a revival of apparent mental freedom secured at the cost of complete psychological enslavement by the process of education, 23” 等、数行にわたる長い文章がある。

#### 4. 「拡大化された名詞」を用いた試行結果

主題として「自由」を扱った抽象度の高いテキストであったため、Fig. 2 に示したように、講師による時代背景や世界情勢を解説する時間を設けた。また、「拡大化された名詞」を中心とした英文法の理解 + 内容把握をバランスよく指導できるような流れを組み立てた。基本的な流れとしては、まず講師が一段落全てを音読し、次に学生は 1 行ずつ翻訳をする。それを踏まえ講師は「拡大化された名詞」の図式化した文章を板書し、文法構造および内容を丁寧に解説した。その後段落をまとめる際、当時の歴史的背景を解説し、参加者は英文法・内容両方に関して自由に質問や意見を述べ全体で議論をおこなった。ラッセルの言う「自由」をとおして、現在の我々にとっての「自由」を考え、それぞれが意見をまとめるよう促した。そのため、読書会の開催時間は 90 分から 120 分とかかることもあった。

#### 5. おわりに

近年英語教育においては、従来の読む訓練よりも、聞いたり話したりする訓練が重視されるようになってきている。この傾向自体が悪いわけではないが、子供ではなくある程度の概念構成ができるようになって大人として英語を学ぶ者にとっては、概念化の結果として生じる「拡大化された名詞」を扱う訓練なくしては、英語学習の本来の可能性を留めてしまうかもしれない。同様に、英語における文法指導は一般的に、文法規則を学生に説明することであるというイメージをもたれることが多いが、コミュニケーションを支える文法を指導する方策を考えることは、学生の物事を

自分で考える力や解決する能力を育成していくことにもつながるのではないだろうか<sup>11)</sup>。

テキストの文章中に存在する「拡大化された名詞」そのものには、作家の思考が凝縮されている。「拡大化された名詞」を取り出して、日本語との名詞として変換するという訓練も、適当なテキストを用いておこなえば、学生の知的訓練として有益であろう。また、英語の「拡大化された名詞」を作る訓練も大人の書く英文修行の一歩ともなろう。

#### 謝 辞

本稿を作成するにあたって、広島工業大学 / 工学部 / 電気システム工学科准教授の細谷健一先生、情報学部 / 情報工学科准教授の本多康作先生には、貴重なご助言をいただき深く感謝いたします。

#### 文 献

- 1) Russell, Bertrand. *What Is Freedom*. 浅川淳注解. 『現代の自由 - その本質と限界 -』大阪：大阪教育図書出版, 1975. 本稿では、このテキストからラッセルの文章を引用する。引用文に続く数字はページ番号を示す。
- 2) 井上和子・山田洋・河野武・成田一：『現代の英文法第 6 巻名詞』東京：研究社, 1985.
- 3) Quirk, Randolph and Greenbaum, Sidney. *A Concise Grammar of Contemporary English*. New York: Harcourt Brace Jovanovich, Publishers, 1973. pp. 59-113.
- 4) Pence, R. W. and Emery, D. W. *A Grammar of Present-Day English*. New York: Macmillan, 1963. pp. 3-32.
- 5) 小寺茂明：『英語教科書と文法教材研究』東京：大修館書店, 1996. pp. 212-16.
- 6) 本多勝一：『日本語の作文技術』東京：朝日新聞社, 1976.
- 7) 天谷春香：「語順への長さと言律句の効果：日本語の長 - 短選好」『日本認知科学会第 27 回大会 発表論文集』2010, pp. 752-56.
- 8) 岡田伸夫：『英語教育と英文法の接点』京都：美誠社, 2001. pp. 49-57.
- 9) 田中茂範・佐藤芳明・阿部一：『英語感覚が身につく実践的指導 - コアとチャンクの活用法』東京：大修館書店, 2010.
- 10) 霜崎 實・他 13 名：『CROWN English Series I, II』東京：三省堂, 2012.
- 11) 田中武夫・田中知聡：『英語教師のための文法指導デザイン』東京：大修館書店, 2014.

